

A-11-3) Phase contrast angiography による
脊髄血管病変の描出について

松沢 等・秋野 実 (北海道大学)
岩崎 喜信・阿部 弘 (脳神経外科)
今村 博幸・斎藤 久寿 (札幌麻生脳神経
外科病院)
宮坂 和男 (北海道大学)
放射線科

【目的】我々は脊髄の血管病変について、MR-Angiography による画像と、流体ファントムによる実験結果、従来の血管造影との比較検討をおこなった。【方法】使用機種は 1.5 TGE 社製 SIGNA. C.L.Dumoulin 等による Phase contrast angiography を用い、直径 5 インチの surface coil を receiver として撮像した。臨床症例は脊髄 AVM を中心とした 6 症例 15 スキャンである。これと平行して、ポンプを用いた流体ファントムによって撮像実験をおこない、画像の基礎的解釈のための手段とした。【結果】高流量の AVM 等の場合、feeder や draining vein の描出は良好であった。しかし、一部の AVM, Hemangioblastoma の場合、従来の血管造影とは一致しない画像が得られることがあった。【結論】MR-Angiography による脊髄の血管病変の画像評価は有用であるが、臨床的な経過観察に用いる場合には、画像の再現性、定量性について慎重な検討が必要と思われた。

A-12-1) 携帯型自動血圧計を用いた血圧日内変動に関する検討
—特に健康者と脳血管障害患者との対比—

苗代 弘 (海上自衛隊八戸
航空衛生隊)
小穴 勝磨・村上 寿治 (八戸赤十字病院)
和田 司 (脳神経外科)
金谷 春之 (岩手医科大学)
脳神経外科

脳血管障害の発生における最大のリスクファクターは高血圧症である。最近になって本邦でも簡便な携帯型自動血圧計による血圧測定 (ABPM) が臨床に供されるようになった。今回、演者らは ABPM を用いて、健康者群 (N群)、本態性高血圧症群 (H群)、脳血管障害群 (V群) における血圧日内変動パターンを検討し興味ある知見を得たので報告する。自動血圧計は A & D company 製 (TM 2020)、血圧測定は 1 時間間隔で施行した。対象は N群 5 例、H群 4 例、慢性期出血性 V群 4 例、慢性期閉塞性 V群 4 例である。血圧の日内変動パ

ターンは N群では夜間就寝時で収縮期、拡張期血圧は共に低下するが基底血圧 (拡張期) は 50 mmHg 以下にはならない。一方 H群では重症度につれて夜間血圧の低下幅が小さく日内変動のパターンの乱れを認める。出血性 V群では夜間も高血圧を呈し日内変動の消失を認める。閉塞性 V群では、昼間・夜間帯ともに動揺性血圧を示す傾向が認められた。

A-12-2) 当科における過去 10 年間の脳血管障害の病像の変化について
—特に脳梗塞と脳出血を中心として—

小穴 勝磨・村上 寿治 (八戸赤十字病院)
柴内 一夫・和田 司 (脳神経外科)
金谷 春之 (岩手医科大学)
脳神経外科

過去数年間の食生活の改善と降圧剤の進歩によって脳梗塞や脳出血の発生状況並びに病像には変化がみられる。今回演者らは、当科の過去 10 年間の両疾患を対象として、それらの変化を検討した。対象期間は昭和 55 年から平成元年にわたる 10 年間である。年度別入院患者数からの分析では、脳梗塞は昭和 55 年以降一貫して漸増傾向にあるが、脳出血は昭和 60 年まで漸減し、以後再び増加している。また昭和 58 年までは脳出血が多く、昭和 59 年以降は脳梗塞が多い。患者年齢からの分析では、10 年間を通じて、30 歳台、70 歳台では両疾患は共に少なく、50 歳台、60 歳台が両疾患の好発年代である。50 歳台では脳出血が、60 歳台では脳梗塞が多かった。また昭和 61 年以降では、60 歳台、70 歳台の脳出血の増加傾向がある。被殻出血の手術例を対象とした分析では、10 年間の前半期と後半期で比較すると、後半期では神経学的重症度が軽く、CT 分類も軽症で、血腫量 (CT 上測定) も小さい傾向がみられた。

A-12-3) 脳血管障害急性期管理における坐位訓練の意義

香城 孝磨・伊藤 秀樹 (富山赤十字病院)
脳神経外科

脳血管障害急性期例の坐位訓練成績について検討する。【方法】対象は発症後 2 週間以内リハ開始の 135 例中、坐位・起立訓練を実施した 48 例である。血圧変動は 20 mmHg 以下を小変動、21 mmHg 以上を大変動とし、経過を、1 型：小変動のみ、2 型：大変動→小変動、3 型：訓練角度が増す度に大変動、4 型：不規則に大変動、に分類した。【結果】(1) 被殻出血 15 例。CT 分類で血圧変動

型（坐位訓練時の型→起立訓練時の型）をみると，Ia 4例（1→1が2，2→2が2），IIIa 7例（3→2が3，4→3および4が各2），IIIb 2例（4→4が2），IVa 2例（4→2が2），(2) 視床出血16例．IIb 12例（1→1が2，2→1が3，4→2，3，4がそれぞれ2，2，3），IIIb 4例（4→3および4が各2）．(3) 脳梗塞17例．穿通枝領域群5例（2→2が2，3→3が3），辺縁枝領域群4例（4→4が4），穿通枝+辺縁枝群8例（4→3および4がそれぞれ3，5）．【結論】脳血管障害急性期例の管理上，CT分類に基づいた早期リハの検討が重要である．

A-12-4) 脳血管障害後の歩行機能に対する高次脳機能の影響

今田 隆一（宮城厚生協会泉
病院脳神経外科）

【目的】近年，脳血管障害後の機能障害における高次脳機能の役割が注目されている．そこで長谷川式簡易精神機能評価法（HDS）と非言語的精神機能を表現するとされている Kohe block design test（KBD）とを取り上げ，これらと発症3カ月時点での歩行自立度とを比較検討した．【検討内容】① rehabilitation を要した急性期脳血管障害の麻痺側別の歩行自立度．② KBD を測定した左片麻痺症例116例における IQ score 別の歩行自立度．③ 脳出血症例52例における KBD・HDS・麻痺 stage と歩行自立度．【結果】① 歩行自立度は左片麻痺症例において有意に低い傾向を認めた（ $p<0.01$ ）．また全群において麻痺 stage に相関していた．② 左片麻痺症例では歩行自立度は KBD の IQ score に相関する傾向を認めた．③ 脳出血症例でも同様の傾向であったが，HDS との相関度は KBD との相関に比してやや希薄であった．

V-1-1) 聴神経腫瘍に対する Trautmann の三角からの手術

山嶋 哲盛・長谷川光広（金沢大学脳神経）
立花 修・山下 純宏（外科）

聴神経腫瘍に対する Trautmann の三角からの手術の適応と手技，特徴について報告する．

適応は，(1) 内耳道内の腫瘍が大きく，後頭下開頭による Retromastoid Approach では全摘が困難，(2) 背面を覆う小脳が厚く，後頭下開頭では小脳の圧排が強

くなる，(3) 腫瘍が Petrous Apex より Clivus にかけて伸展している為，後頭下開頭では術野が深くなる事が予想される等の聴神経腫瘍である．

手術手技（Video 供覧）の要点は，(1) Trautmann の三角は直径が 2 cm 以下と小さいが，側頭葉底面や S 状静脈洞の圧排することで拡大し得る，(2) Fallopian Canal は開放せず，しかもぎりぎりまで乳様突起を削る，(3) 腫瘍は被膜のみが残るぎりぎりまで debulk し，薄くなった被膜を愛護的に脳幹や小脳から剥す等である．

本手術の長所は，(1) 小脳の圧排が少ない，(2) 内耳道内の腫瘍を摘出しやすい，(3) 3×4 cm 大の聴神経腫瘍は全摘が可能，(4) 後頭下開頭よりは Clivus に 2 cm 近い等である．一方，短所は，(1) 視野が狭く，周囲構造の確認は困難で，(2) 聴力低下，感染，髄液漏等を合併する危険があることである．

V-1-2) Transsphenoidale approach により垂全摘出した斜台部脊索腫の1例

会田 敏光・阿部 弘（北海道大学脳神経外科）
三森 研自・中川 端午
本宮 峯生・桜木 貢（北海道脳神経外科）
磯部 正則（記念病院）

斜台部に発生した脊索腫は，その発生部位から，手術到達法の選択には苦慮することが多い．我々は，最近，transsphenoidale approach により垂全摘出できた斜台部脊索腫の症例を経験した．症例は，62歳男性で，右外転神経麻痺以外には，陽性所見は認められなかった．腫瘍は，斜台下端近くから，鞍上部まで達し，斜台は全て，腫瘍に置きかわっていた．transsphenoidale approach により摘出し，一部，トルコ鞍上部に腫瘍が残存したが，外転神経麻痺は改善した．術中に，髄液の流出をみたが，パッキングと髄液ドレナージにより髄液漏を防止できた．側方伸展が著しくない斜台部脊索腫に対しては，transsphenoidale approach により，斜台部下端近くまでの腫瘍摘出は可能であり，安全な到達法と考えられ，手術ビデオを供覧したい．

V-1-3) 第4脳室 epidermoid の1手術例

栗本 昌紀・西嶋美知春
久保 道也・岡 伸夫（富山医科薬科大学）
高久 晃（脳神経外科）

第4脳室に発生した epidermoid の摘出術を経験したのでビデオを用いて報告する．症例は54歳女性，数年